

習慣的意味仮説による概念プラグマティズム擁護の試み

加藤隆文 (日本学術振興会特別研究員 PD 名古屋大学)

発表者は、チャールズ・サンダース・パースのプラグマティズムを現代の心の哲学の諸議論と接続し、その上でパースの思想を再評価するという研究を遂行中であり、本発表はそうした研究の一環として行われる。本発表では特に、ジェリー・フォーダーによる概念プラグマティズム批判を検討し、パースのプラグマティズムはフォーダーの批判をかわすことのできる選択肢のひとつになりうると論じる。

一般的に、概念プラグマティズムとは、命題を構成する概念はそれぞれ、その概念の所有条件 (possession condition) によって個別化されるという考えである (Peacocke, 1992)。この考えは、ある概念が何であるかは当該の概念の推論的役割や因果的役割によって決まるという主張に結びつく。フォーダー (Fodor, 1994; 1998) は、概念プラグマティズムは心の哲学や認知科学において標準的な考え方となっているが実は根本的な問題をはらんでいるのだとして、自身では採用しない。フォーダーの概念プラグマティズム批判の要点は次の通りである (Fodor, 1994)。まず、概念の推論的役割を分析的に明らかにできれば、概念プラグマティズムは維持可能に思える。例えば、概念「BACHELOR」を概念「UNMARRIED MALE」と同一視できるなら、概念「UNMARRIED」と概念「MALE」の推論的役割から概念「BACHELOR」を十分に説明できる。しかし実際には、例えば概念「GREEN APPLE」は、概念「GREEN」と概念「APPLE」から合成的に得られることのない情報を持つ(「火を通した方が美味しい」など)。よって概念の分析的定義から概念の意味を明らかにする路線(定義説)は不十分だ。それでは、推論的役割を分析的に説明するのではなく、統計的に信頼性の高い推論的役割を明らかにして、それによって概念を説明してはどうか。つまり、いわゆるプロトタイプ説を採って概念プラグマティズムを維持する路線がありうる。しかしフォーダーの主張によると、この説は概念の分析性を手放してしまうがために、概念の合成性や生産性や体系性を説明できなくなるので、擁護できない。こうして彼は、概念プラグマティズムの代わりに概念原子論を採用すべきだとする。

また、概念原子論は、クワイン (Quine, 1953) の指摘した「経験主義の2つのドグマ」に対するフォーダーなりの返答でもある。というのもフォーダーは、分析的なものと総合的なものを明確に峻別することは不可能であるというクワインの議論を実質的に受け入れつつ、しかしそうすると意味の全体論は立ちいかない、ゆえに残る選択肢は概念原子論なのだ、と考えているからだ (Fodor and Lepore, 1992)。ただし、もとのクワインの議論においては、全体論の内実が必ずしも明快ではない。クワインの全体論を意味の全体論として受け取ることが妥当かどうかは別途検討されるべきである。ともあれ、概念についてのプラグマティストは、こうしたフォーダーの議論に回答する必要がある、またその際には、クワインの全体論をどのようなものとして引き受けるのか、あるいは完全に却下してしまうのかを、述べるべきである。

以上のようなフォーダー説への応答は様々であるが (Peacocke, 2000; 2004; Prinz, 2002; Prinz and Clark, 2004 など)、

本発表ではリーヴス (Rives, 2009) の議論に注目する。リーヴスは概念プラグマティズムには少なくとも2つの生き残りの道があると述べ、「意味仮説プラグマティズム (Meaning-Postulate Pragmatism)」と呼ばれる立場を提案している。発表者は、アブダクション (仮説形成推論) を発端として習慣を形成して記号過程 (semiosis) を進化させてゆくというパースの思想が、この「意味仮説プラグマティズム」を具体化し、説得力を増すものと考えている。こうして本発表は、パース思想を参照することで「習慣的意味仮説説」を提案し、フォーダーのプラグマティズム批判に回答するという内容になる。

ただし発表者は、リーヴスの「分析的推論は内的に構造化された (internally-structured) 語概念を必要とするという主張を放棄することによって、意味仮説プラグマティズムは概念原子論と分析/総合の区別の両方を受け入れる方法を提供する」(Rives, 2009 拙訳) という結論は不用意であると考え。「内的に構造化された語概念」を放棄した上で主張される分析性とは、むしろはや分析/総合の区別を放棄した上でそれでも追求される全体論的理論における新しい意味での分析性と捉えるべきである。つまり、クワインが『ことばと対象』の中で論じた「分析仮説 (Analytical Hypotheses)」のような (Quine, 1960)、可謬的だが修正を重ねて洗練されてゆく理論 (パースの言葉で言えば記号過程) を念頭においた方が適切である。この意味でも、概念プラグマティズムをめぐる議論をパース思想に接続することには意義がある。

References

- Fodor, J., and Lepore, E. (1992). *Holism: A Shopper's Guide*. Oxford: Blackwell.
- Fodor, J. (1994). Concepts: a pot boiler. *Cognition*, Vol. 50, pp.95-113.
- Fodor, J. (1998). *Concepts: Where cognitive science went wrong*. New York, NY: Oxford University Press.
- Peacocke, C. (1992). *A Study of Concepts*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Peacocke, C. (2000). Fodor on Concepts: Philosophical Aspects. *Mind & Language*, Vol. 15 No. 2 and 3, pp. 327-40.
- Peacocke, C. (2004). Interrelations: Concepts, Knowledge, Reference and Structure. *Mind & Language*, Vol. 19 No. 1, pp. 85-98.
- Prinz, J. (2002). *Furnishing the Mind*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Prinz, J., and Clark, A. (2004). Putting Concepts to Work: Some Thoughts for the Twentyfirst Century. *Mind & Language*, Vol. 19 No. 1, pp. 57-69.
- Quine, W.V.O. (1953). Two Dogmas of Empiricism. *From a Logical Point of View*. Cambridge, MA: Harvard University Press, pp.20-46.
- Quine, W.V.O. (1960). *Word and Object*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rives, B. (2009). The Empirical Case Against Analyticity: Two Options for Concept Pragmatists. *Minds & Machines*, Vol. 19, pp.199-227.